溝ぶたで害獣対策強化

渋川市の赤城商会　手軽な樹脂製人気

害獣による農作物への被害を防ごうと、コンクリート製品製造の赤城商会（渋川市吹屋）が、動物が農地に侵入する際の経路となる道路上に設置し、動物を足止めする樹脂製の溝ぶた「わたれませんLIGHT」の普及を進めている。従来の金属製よりも低コストで簡単に施工できるメリットがあり、全国の農家が積極的に導入している。

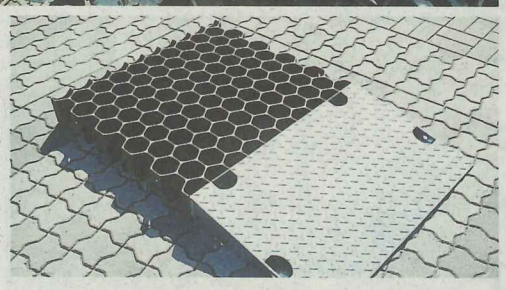
「わたれませんLIGHT」は1枚当たり幅90センチ、奥行き79センチ、重さ20キロ程度。直径8センチ、深さ12センチの六角形の穴がハチの巣状に開いており、イノシシやシカが通過しようとすると足を取られる。ひづめが穴に落ちたり挟まったりするのを嫌う習性を利用した。

必要な枚数を平らな地面にボルトで連結させる簡易な作業で設置できる。大人2人が半日程度で取り付けられる手軽さと1枚5万2千円（応相談）という価格設定が好評で、1月末までに北海道から九州地方の農地・民間施設など37カ所に計366枚を納品した。

同社は2012年から、県中部農業事務所や県鳥獣被害対策支援センターなどの協力を得て開発した鋳鉄製の溝ぶた「わたれません」を手掛けている。従来の溝ぶたは全国での納入実績は増えているが、公道に設置する仕様で、土木施工技術や機械が必要。そのため、生産者から自らの手で対策したいという声が寄せられていた。低コストかつ簡単施工という消費者の需要に応じる形で、19年に林道や農道に設置できる樹脂製の商品の販売を始めた。

福井県越前市の林道に「わたれませんLIGHT」を設置した実証実験では、20年6～10月に計6頭のシカが確認されたが、道を越える姿は見られなかった。同社開発営業部の柳沢正和課長は「溝ぶたを置くことで、地元農家が害獣対策に向け意識を高めるきっかけにもなっている」と話す。

県内の野生鳥獣による農林業被害額（20年度）は5億6152万円で前年並みだが、捕獲総数は2万861頭と過去最高。農林水産省では昨年、対策として溝ぶたの設置・管理マニュアルを作成するなどその必要性は高まっている。柳沢課長は「被害を減らす上で、農地に接続する道路上での対策として溝ぶたの設置は重要になっている」と話す。



県内山間地には害獣対策の溝ぶたが敷かれている（上）、樹脂製の「わたれませんLIGHT」

ビニールハウス内でタラノメを収穫する小宮さん。適切な温度管理が欠かせない

長谷川さんが最優秀賞

JAぐんま女性大会　組織活動を発表

JAぐんま女性組織協議会とJA群馬中央会は7日、前橋市のJAビルで第63回JAぐんま女性大会を開いた。JA女性組織活動体験発表は、JA利根沼田女性部の長谷川久代さんが最優秀賞を獲得。長谷川さんは7月に栃木県で開かれる関東甲信越地区女性組織リーダー研修会に県代表として出場する。

長谷川さんは「今、私たちにできること」をテーマに育てる。20～30日程度で収穫できるようになり、1～3月にピークを迎える。

小宮さんは10年ほど前、シイタケの代替作物としてタラノメに目を付け栽培を開始。「単価が高く、収穫量を計算しやすいのも魅力だった」。初めの年は木が十分に育たず、思うような収量を確保できなかったというが、保温の方法や苗の育て方などを改善した。現在は年間500キロ以上を出荷する管内の中心的な生産者と

表彰状を受け取る長谷川さん（左から2人目）

必要な人に野菜を

JA全農ぐんま　県産ハクサイ贈る

県産の野菜の魅力を知ってもらおうと、JA全農ぐんまは1月28日、NPO法人三松会（館林市）が運営する「フードバンク北関東」に佐波伊勢崎、邑楽館林の両JA管内で収穫されたハクサイを寄贈した。

国の「緊急需給調整事業」の一環。全農ぐんまでは野菜の価格が低迷した際、県内のフードバンクに提供したり加工用に販売したりして、有効に活用するよう努めている。

フードバンクへの野菜の寄贈は今回で3回目。NPOを通じて、県内の福祉施設や子ども食堂などに配られる。

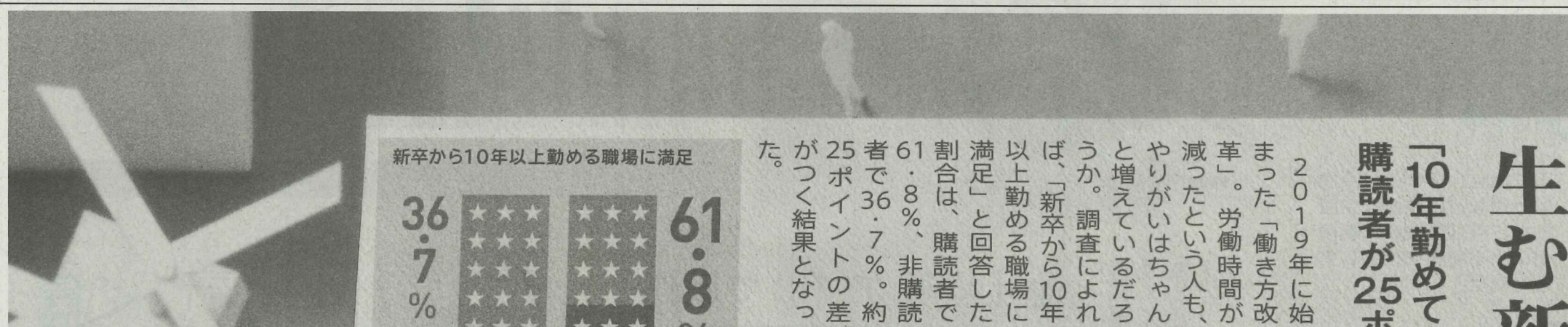
フードバンク北関東にハクサイを届けるJA全農ぐんまの担当者

県JA職員資格認証試験合格者

【中級】▽赤城たちばな　赤沼真実、高瀬慶吾、高橋峻、竹内洋輔▽前橋市　上野頌平、女屋瑠乃、久保田紋加、酒井麻実、鈴木淳、須藤亜美、曽田和石、高井大河、高橋晃、高山このみ、戸沢郁巳、仲沢洋太、中村愛、松嶋智帆、松島直紀、森下世菜、横沢美佳▽佐波伊勢崎　岩崎達也、小暮千尋、多賀谷友貴、田中弘己、星野拓夢、山田ひとみ、吉田修▽たかさき　内田実咲、田中達也、萩原亮太、森田貴之、横堀航平、渡辺裕太▽はぐくみ　旭和馬、塚越実央、山口智美▽たのふじ　新井美帆、上原圭太、小野里旁弘、粕谷純花、佐俣舞衣、田胡美帆、三浦茉由▽甘楽富岡　内山綾乃、大河原有唯、北村祐子、佐藤望、竹井悠、勅使河原悟、橋本愛嘉▽碓氷安中　染矢千夏、多賀名梨沙、田中勝美、知高良浩、中島渉▽北群渋川　石倉樹、伊藤啓、大木美里、小浦英喜、下龍之介、広神圭介、福田幸恵、松嶋慶、三浦零羅、武藤七海、横山貴▽あがつま　飯塚恵理、大城美月、堀沢瞬太郎▽嬬恋村　黒岩隼人、佐藤捷平、篠原直生、中村春希、宮崎翔大▽利根沼田　石坂卓也、伊与久敬雄、金子未咲、亀田拓郎、木内滉希、佐藤陸哉、高橋健太、竹内竜士、林伸幸、藤井喜子、真下麗奈▽にったみどり　大島奈々、大野滉介、清水さおり、染川和裕、高橋創、西村成▽太田市　石川陽一、菊地早紀、菊池卓洋、斉藤沙友里、堤満里奈、長尾美奈、柳川平、山田裕子、吉田美憂▽邑楽館林　荒川文子、池田莉奈、稲村知香、今泉憲也、岡野悦子、岡元恵美、柿沼直樹、川島康平、神田汐理菜、熊倉幸希、栗原春香、小平直実、小谷野聡也、近藤聡美、斎藤里恵子、篠木幸子、鈴木亘、高賀茂克弥、豊田真美、前川綾花、松本星菜、松本拓真、鑓田真希、若山月、渡辺修平▽群馬中央会　松浦陽介▽全農ぐんま　青木翔太郎、佐藤綾音、関根里菜子、高橋幸心、田所晃平、戸部凌佑、吉岡雅泰、吉田光希▽群馬農協電算センター　岩間彩花、鈴木哉人、須永健斗、星野敦史（敬称略）

感染拡大の影響で女性部の活動が制限される中、コロナに伴う差別や偏見をなくす運動「シトラスリボンプロジェクト」や食品ロスの削減を目指すフードドライブなど新たな取り組みに挑戦した経緯を紹介。「無理なく気軽に誰でも参加しやすい活動を通じ、誰もがつなぐ力を込めた。

大会では食と農、地域を次代につなぐため、JA女性組織活動の活発化と前進を誓う大会宣言を採択。JA事業への理解を深めてもらおうと、各連合会がそれぞれの事業内容を紹介する場面もあった。



生む

「10年勤めて購読者が25ポ

2019年に始まった「働き方改革」。労働時間が減ったという人も、やりがいはちゃんと増えているだろうか。調査によれば、「新卒から10年以上勤める職場に満足」と回答した割合は、購読者で61・8％、非購読者で36・7％。約25ポイントの差がつく結果となった。

新卒から10年以上勤める職場に満足

36・7％　61・8％